

第一部

グローバル人材が必要とする能力と CLIL の概念

白石万紀子

1. 21世紀に活躍するグローバル人材が必要とする能力

世界のグローバル化とそれに付随する様々な問題が次々顕在化する現代、また AI, IoTなどの技術革新やその適用を可能にする通信網など社会インフラの進歩のスピードが非常に速い現代において、社会的貢献し続けることができる能力とはどのようなものだろうか。2018年の中央審議会は『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』の中で、こうした社会的背景を1、テクノロジーの急速かつ継続的な変化、2、社会が個人間の相互依存を深めつつ、複雑化、個別化していること、3、グローバリズムが新しい相互依存を創出するとともに人間の行動が個人の属する地域や国を超えて経済競争や環境問題に左右されている、とした上で、次のように提言している。

予測不可能な時代の到来を見据えた場合、専攻分野についての専門性を有するだけではなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力の基盤の上に、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材、すなわち「21世紀型市民」が多く誕生し、変化を受容しジレンマを克服しつつ、さらに新しい価値を創造しながら、様々な分野で多様性を持って活躍していることが必要である。文理横断的にこうした知識、スキル、能力を身に付けることこそが、社会における課題の発見とそれを解決するための学問の成果の社会実装を推進する基盤となる (p.4)。

論理的思考力、判断力、表現力、という従来から求められていた能力の他に積極的に社会を支え、改善し、多様性を持ち、ジレンマを克服しつつ新し

い価値を創造するという資質がこれからの時代に求められる人材「21世紀型市民」として期待されていることが解る。

この「21世紀型市民」という言葉は、2005年に中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』の中ですでに使われているが、同じ頃からOECDやUNESCO、EU、米国でも21st Century SkillsやGlobal Competenceという用語で様々な提言がなされてきた。Scott (2015) は、UNESCOのワーキングペーパーの中で21世紀に必要な学びを3つに分類し、具体的スキルを次の様に提言している。

1). 知るための学び

必要な知識（言語、数学、芸術、科学、経済、地理、歴史、政治等）を統合し、分野横断的な知識や現代生活に必要な知識（グローバル問題、ビジネス、起業、健康、市民生活等）を自分の生活に当てはめて生涯にわたり学習しつづける

2). 行動するための学び

批判的に思考する

問題解決する

コミュニケーションをとる

協働する

創造する

革新的思考をする

メディア情報を適切に扱う

情報技術（デジタル情報技術）を適切に扱う

3). 生きるための学び

失敗に対応する

対立や危機に対応する

自己のアイデンティティを確立する

異なる社会や文化に対応する

個人の責任をとる

自己統制する

率先して行動する

重要で複雑なグローバル問題の意味を理解する

メタ認知スキルを持つ

起業家的思考を持つ

学び続ける習慣を身に付ける

4). 共生のための学び

異なった価値観を求め、大切にす

チームワークと相互関係を大切にす

市民としての権利と義務を学ぶ

オンラインに責任を持って生産的に参加することを学ぶ

グローバル問題を知る

文化の差を理解しコミュニケーションをとる

この中で4). 共生のための学び、の内容はOECDのGlobal Competence Framework (2018) の中でも同様な事が以下の4つに分類して詳細に述べられている。

1. 地域、世界的、文化的な重要問題の状況を分析・検討できること
2. 自分と異なった視点や世界的視点を尊重できること
3. 自分と異なった国籍、民族、宗教、社会的文化的背景、性を持つ人々と積極的で前向きな関係性を築くことができること
4. 持続可能な発展や世界規模での幸福の追求に対して積極的で前向きな行動を起こす能力や傾向を持つこと (p.8)

さらにGlobal Competence Frameworkは、こうした能力を身に付けるために、知識、スキル、態度、価値の4つの要素に分けてそれぞれ必須の項目を次の様に挙げている。

1). 世界と異文化についての知識

グローバル問題

社会経済的差異に関わる問題

文化、言語の違いに関わる問題

開発と発展に関わる問題

持続可能な環境

2). 世界を理解し、行動を起こすスキル

様々な情報を適切に利用し、情報に基づいて理由を述べるスキル
異なる背景の人と尊敬の念を持ちつつ効果的にコミュニケーションをとるスキル

共有できる解決を目指して対立状態に対処するスキル

支配的文化環境や今までにない状況に自己の思考や行動を適応させるスキル

3). 世界に開かれた態度

他の文化的背景を持つ人々に対して心を開くこと

全ての人の尊厳や信条や意見、行動の選択の権利を尊重すること

地球市民としての考え方を持つこと

4). 人間の尊厳と文化的多様性を大切にする価値観をもつこと

Voogt et al. (2010) は、EU、OECD、UNESCO の他にも Partnership for 21st century skills (P. 21) など米国を中心とした5つの団体が提唱する21世紀に必要なスキルのモデルを横断的に調査し、全てのモデルに共通するスキルとして、協働、コミュニケーション、情報コミュニケーション技術を扱うスキル、社会、文化、市民に関する知識、創造性、批判的思考、問題解決、質の高い生産性などを挙げている。

以上の様に、日本を含め世界の様々な地域の組織が21世紀に活躍するために必要なスキルや学びの内容を提言しているが、分類の仕方や表現は異なってもほぼ共通するスキル、内容が必要であることを理解することができる。個人が学校や職場で必要とされるスキルや能力ばかりでなく、自己、地域、自国の利益を超えて広く社会や世界に積極的に貢献できるスキルを身に付けることが必要とされているのである。

それでは日本の大学においてどの様にこうしたスキルや学びを提供できるのであろうか。学びの内容と共に、教育方法にも様々な工夫が求められる。SDGsとしてまとめられているグローバル問題を題材として取り上げるというだけでは十分ではなかろう。大教室での講義という形態では学生の批判的思考力を刺激し、協働して学ぶアクティビティを行うための知的理解を深めることができるディスカッションを展開し、問題解決型レポートに意義あるコメントを大人数にフィードバックすることは、教える側にとっての挑戦 (Tanaka, 2019) かもしれない。しかし、例えば語学クラスのような少人数のクラスであれば、ディスカッションやプレゼンテーション、また論文作成の指導も現実的である。こうした理由から英語教育の分野を中心としてCLIL (内容言語統合型学習) が欧州に端を発して世界的に議論され、最近日本でも取り入れる大学が増えてきた。次の項ではCLILの基本概念について考察する。

2. CLILの基本概念

2.1 CLILの特徴

CLIL (Content and Language Integrated Learning) は、教える内容と言語習得の両方に焦点を置いた教育方法であり、母国語やすでに獲得している複数言語の他にもう一つの言語が内容と言語の両方を学ぶために使用される (Coyle et al. 2010)。どの言語でもCLILは可能であるが、本稿では英語を使った教育を前提として考察することとする。

CLILが他のバイリンガル教育、ImmersionやContent-based Instruction (CBI) (Brinton et al., 1989) と差別化して論じられてる理由は、CLILがその教育方法において、Bruner (1960) らの学習理論の他様々な第二言語習得理論の成果を取り入れている点と、効果的な学習を促進するために認知機能の利用の重要性を強調している点 (Kavanagh, 2018) であると言える。その他の学習理論としてはVygotsky (1978) の社会文化的視点、やGardner (1983) のmultiple intelligences、第二言語習得としてはBenson & Voller (1997) の学習者自律の視点などがその一例である (Caraker, 2017)。英語教育研究の分野そのものがその視点によっては、第二言語習得、応用言語学、教育心理学

の分野を横断的に研究する性質を有するが、CLILの研究もまた学習理論と第二言語習得の両方にまたがり、言語と内容に焦点をあてた独自の教育方法を構築した。

2.2 4つのC

CLILにおける認知機能の利用については4つのC's (Culture, Cognition, Content, Communication) (文化、認知、内容、コミュニケーション) としてまとめられており、常にこの4つを念頭に置いて授業が展開されるべきであると提唱されている。

Culture

CLILの授業では自分と他者の間で協力やお互いの違いを含めた理解に基づくやり取りが必要である。Cultureの意味には自己と他者の関係性や、自分の周りのコミュニティーや教室内での差違や多様性の理解、異文化理解を促進する工夫が含まれる。

Cognition

CLILでは批判的思考、問題解決などのより高い次元の認知機能を学習活動において使用する。学習者への働きかけとして、また授業運営の際にBloom (1955) の分類で言う、記憶、理解、応用などの低い次元の思考スキルだけでなく、分析、評価、創造などのより高い次元の思考スキル (Kavanagh, 2018) の利用を促していく必要がある。

Content

CLILでは学習者にとって意味のある内容を学習活動の内容とする。言語学習のための教材を使用するのではなく、内容そのものを英語で学ぶことによって、学習者は学習意欲を維持しやすく、学習者にとって意味のある言語活動を展開することが可能となる。内容については制限が無く、例えば生物学の様な教科そのものから、グローバル問題の様な他分野にわたる問題を扱うことも考えられる。

Communication

語学教育の際に区分として使われることが多い従来の4スキル（reading, listening, speaking, writing）の個々の4技能に焦点を当ててではなく、学習者がこの4技能を総合的に利用してコミュニケーション活動することを促進し、助ける役目を教員が担うという意味を含む。また他者とのコミュニケーションを通して自己の学びを深め、新しい価値観を創造し、問題解決をはかる訓練を行う。

2.3 CLILの言語三角形モデル

Coyle et al. (2010) は、もう一つのCLILの基本概念として、言語をどの様に捉えるかを示した言語三角形モデルを示している。これはlanguage of learning, language for learning, language through learningの3つを頂点とした三角形で、その中心部にはCLILの言語的発達が据えられている。

Language of learning

言語を、学習内容を理解するためや授業内のアクティビティを行うために必要なものとして捉えている。例えば、内容理解に必要なキーワードやフレーズ、文法項目の知識などである。

Language for learning

言語をその言語を実際に使うために必要な機能として捉えている。例えば、ペアワークやグループワークをする際の質問や助け合い、ディスカッション、ディベート、発表等に必要言語活動が挙げられる。

Language through learning

言語を、授業内でのコミュニケーションや内容についてのやり取りの中で予期せずに出てくる新しいものとして捉えている。こうした「テキスト」に無い新しい言語は繰り返し使用され、また発展的に利用される。

CLILはカナダや米国を中心としたimmersionやContent-based Instruction

の研究成果を取り入れながら1990年代に欧州を中心に始められてのち発展を続け、現在では世界中で活用されている概念である。また対象年齢や教育レベルも幅広く、幼稚園、小学校、中学高校、大学にまで適応されている。従来の様々な第二言語習得や外国語教育のアプローチとも組み合わせて実施されることが多く、上記の基本概念を念頭に置きさえすれば、かなり広範囲の実施方法がCLILと認識されているという特徴がある。

3. グローバル人材が必要とする能力養成とCLILの適合性

これまで説明したCLILの基本概念を利用した教育方法は先に述べた21世紀スキルを有するグローバル人材を育てていくために役立つのであろうか。ここではCLILの適用の妥当性について述べることにする。

まずCLILの基本概念4C'sのCultureおよびContentは、自己と他者の間の理解を深める、多様性や異文化理解を深めるという点でScott (2015) の挙げている、『知るための学び』の他、『生きるための学び』の中の「異なる社会や文化に対応する」、「重要で複雑なグローバル問題の意味を理解する」、『共生のための学び』の中の「異なった価値観を求め、大切にする」、「グローバル問題を知る」、「文化の差を理解しコミュニケーションをとる」に適合し、OECDのGlobal Competence Framework (2018) では『世界と異文化についての知識』、『世界を理解し、行動を起こすスキル』、『世界に開かれた態度』、『人間の尊厳と文化的多様性を大切にする価値観を持つこと』の全てに適合している。例えば、グローバル問題を題材として取り上げることで、世界の様々な地域の政治、社会経済、文化的な視点で理解を深め、自己との差異と多様性について理解を深めるといった知識レベルの理解から、クラスの中でもグループワークを通して違った考えを持つメンバーと共通目的のために協働するスキルを身に付けることができる。

次にCLILの基本概念4C'sのCognitionについては、Scott (2015) の『行動するための学び』の中の「批判的に思考する」、「問題解決する」、「創造する」、「革新的思考をする」、『生きるために学ぶ』の中の「メタ認知スキルを持つ」、

「自己統制する」に適合し、OECDのGlobal Competence Framework (2018)では『世界を理解し、行動を起こすスキル』の中の「様々な情報を適切に利用し、情報に基づいて理由を述べるスキル」に適合している。例えば、問題解決型の論文作成やプレゼンテーション作成といった授業アクティビティにおいて、情報を適切に収集、分析、評価、統合し、論理的に議論を展開することを学ぶことができる。また様々なアイデアを自由に出し合う中で、創造性や革新的思考を巡らせる経験を重ねることができる。

最後の基本概念4C'sのCommunicationは、Scott (2015) の『行動するための学び』の中の「コミュニケーションをとる」、「協働する」、また『生きるための学び』では「対立や危機に対応する」に、さらに『共生のための学び』では、「異なった価値観を求め、大切にする」、「チームワークと相互関係を大切にする」、「文化の差を理解しコミュニケーションをとる」に適合している。OECDのGlobal Competence Framework (2018) では『世界を理解し、行動を起こすスキル』の中の「異なる背景の人と尊敬の念を持ちつつ効果的にコミュニケーションをとるスキル」、「共有できる解決を目指して対立状態に対処するスキル」、「支配的文化環境や今までにない状況に自己の思考や行動を適応させるスキル」、また『世界に開かれた態度』の中の「他の文化的背景を持つ人々に対して心を開くこと」、「全ての人の尊厳や信条や意見、行動の選択の権利を尊重すること」に適合している。具体的な授業アクティビティとしては、グループワーク、ディスカッションを通じて、普段の自分の生活範囲に無い、自分と違った意見を持つ他者といかに一つの目標に向けて生産的に協働するかを学ぶことができる。文化的差異は広く国や地域だけでなく、もっと身近な、同質と括られがちなクラスの中にも存在する。こうした意味ではクラスレベルの活動でも十分に意義があると考えられよう。また新しい教育技術を駆使して、距離や時差に縛られずに海外の様々な国や年齢層のクラスとディスカッションすることも可能であると考えられる。

ここで分類されなかった、Scottの『行動するための学び』の中の「メディア情報を適切に扱う」、「情報技術（デジタル情報技術）を適切に扱う」、「オ

オンラインに責任を持って生産的に参加することを学ぶ」は問題解決型のプロジェクトを指導する際に含まれる指導内容であろう。さらに、『生きるための学び』の「自己統制する」、「学び続ける習慣を身に付ける」についても、CLILクラスの中で学習計画や学習目標を立てて自律学習を促すことで実施できる内容である。Tanaka (2019) は、21世紀スキルを認知的要素と情動的社会的要素に分け、そのどちらにもCLILの教育方法が役立つと述べている。以上のことから、CLILは21世紀型市民、グローバル人材が必要とするスキルの育成に十分適合していることがわかる。次項では、実際に日本の大学レベル教育の中にCLILを導入する際の留意点について考察する。

4. CLIL 導入時の留意点

日本の大学レベルにおけるCLILの導入に際しては、本学経営学部に入學する学生の英語レベルを前提に次の3点を挙げておきたい。

まず、英語で専門科目の授業 (English Medium Instruction, EMI) を受けることを最終目標として、易から難にいたる十分な段階を用意する必要性がある。学生の英語レベルに応じて教材の難易度や教員の英語による説明のレベル、また内容と言語指導のどちらにより比重を置くか、準備段階やディスカッションでどの程度日本語使用を許容するか、など様々な点で工夫する必要がある。CLIL研究ではこのような工夫を足場かけ (scaffolding) という用語で表現している。伊藤 (2019) は日本の教育現場において学生に適した題材を選び教師による支援 (足場かけ、scaffolding) によって学生の背景知識・スキーマや思考を活性化することの重要性を指摘している。英語指導の比重を徐々に減らし、教材をよりオーセンティックなものにし、自転車の補助輪を様子を見ながら片側ずつ外して行く様な、また足場を徐々に外して行く様な感覚であろうか。

次にEMI教員とCLIL担当教員間の連携が挙げられる。EMIと同時にそのサポート科目としてCLILを取り入れる場合には、EMI教員とCLIL担当教員の連携が大切である。事前にEMIで使用する教材とアクティビティをCLIL

担当教員が共有し、英語の面からどのようなサポートができるか、アクティビティを効果的に行うためにどのような準備が必要かを綿密に打ち合わせていく必要がある。EMIとCLILとは別科目であっても、Team teachingとして捉えて教員が協働していくことが学習をよりスムーズにする点から非常に大切である。教員がCLIL科目への理解と認識を深めると同時に、準備や打合せ等、非常に労力のかかるCLILという教育方法への組織的サポートシステムも不可欠である。

3番目に、学生の英語による発話のハードル、コミュニケーションのハードルを下げる工夫が挙げられる。抽象度の高い内容のディスカッションに英語力が十分でない学生が積極的に取り組める環境と準備を十分にする必要がある。ディスカッションにおいては、積極的に参加できない学生が必ず一定数存在する。前もって内容について理解を深め、語彙や表現方法を準備することはもちろんであるが、自主的積極的な発言を即する工夫が必要である。文法的、語彙的に完全な英語でなくても良いこと、自分の場合と同様に、クラスメートの間違いや発言にかかる時間の長さも受け入れる態度を持つこと、発言したことを授業への貢献と捉えてお互いに評価し奨励すること、一人ひとりの発言を尊重することを教員が明確に伝えて、クラスを不完全な英語でも挑戦できる不安のない環境として提供する工夫が求められよう。

以上第一部では、21世紀に活躍するグローバル人材が必要とする能力とその育成を可能にするCLILの基本概念を考察し、さらにCLILを日本の大学レベルの教育に導入する際の留意点について述べた。第二部では、神奈川大学経営学部が2021年度より設置する、CLIL、EAP、EMIを基盤とした「国際ビジネスコミュニケーション（IBC）・プログラム」の設置背景、およびプログラムの教育目標とその概要について考察する。

引用文献

伊東弥香（2019）「SDGsをジブンゴト化する：CLILの枠組みで考える英語教

- 育」東海大学教育開発研究センター紀要 (3)、東海大学教育開発センター中央教育審議会 (2018) 『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』中央教育審議会 (2015) 『我が国の高等教育の将来像』
- Benson, P. & Voller, P. (1997). *Autonomy and independence in language learning*. London: Longman.
- Bloom, B. (1955). *Taxonomy of educational objectives: The classification of educational goals. Handbook I: Cognitive domain*. New York, Toronto: Longmans, Green.
- Brinton, D. M., Snow, M. A., Wesche, M.B. (1989) *Content-based second language instruction*. New York: Newbury House.
- Bruner, J. (1960). *The process of education*. Cambridge, MA: Harvard university Press.
- Caraker, R. (2017). Towards a CLIL syllabus in Japanese universities. *Kenkyu Kiyu 94*. The Institute of Humanities and Social Sciences, Nihon University.
- Coyle, D., Hood, P., Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press.
- Gardner, H. (1983). *Frames of mind: The theory of multiple intelligences*. New York: Basic Books.
- Kavanagh, B. (2018). An introduction to the theory and application of CLIL in Japan. *Bulletin of the Institute for Excellence in Higher Education Tohoku University, 4*. <http://hdl.handle.net/10097/00123109>
- OECD. (2018). PISA Preparing our youth for an inclusive and sustainable world: The OECD PISA global competence framework.
- Scott, C.L. (2015). The future of learning 2: What kind of learning for the 21st century? *UNESCO Education Research and Foresight Working Papers, 14, November*.
- Tanaka, K. (2019). Content and language integrated learning (CLIL): Compatibility of a European model of education to Japanese higher education. *Meiji Gakuin Review, International & Regional Studies, 54*.

Meiji Gakuin University.

Voogt, J., & Robil, P. (2010). 21st century skills: Discussion paper. Enschede, Netherlands: University of Twente. <http://hdl.voced.edu.au/10707/254371>

Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.